

# 研究計画の概要

有田町立有田中部小学校  
校長 宗 誠

## 1 研究主題名(1年次)

他者と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けた児童の育成  
～コミュニケーションの素地から基礎への滑らかな移行を目指す外国語活動の実践を通して～

### 言語の定義

研究主題について、それぞれの言語を以下のように定義する。

- ① 「他者」とは、学習において、「自分以外の友達、担任、ALT、JTEなどの英語教師」の意。
- ② 「積極的」とは、「能動的に」、「自ら進んで」の意。
- ③ 「コミュニケーションを図る」とは、「聞こうとする」、「話しかける」、「反応する」などの他者と関わり合う姿の意。
- ④ 「態度」とは、「〇〇しようとする姿」の意。
- ⑤ 「態度を身に付ける」とは、「頷く」、「ゲームに参加する」、「繰り返し言う」、「顔を上げて分かるようにする」など授業で見られる、授業へベクトルの向いた姿を示すという意。
- ⑥ 「コミュニケーションの素地」とは、「聞く」「話す」をもとにした「英語への気付きと慣れ親しみ」、「身近で簡単な事柄について外国語で伝え合う力の素地」、「外国語を通してコミュニケーションを図ろうとする態度」の意。
- ⑦ 「コミュニケーションの基礎」とは、「慣れ親しみに「できる」が加わった知識・技能」、「外国語を通して伝え合う基礎的な力」、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」の意。
- ⑧ 「滑らかな移行」とは、3・4年で目指すコミュニケーションの素地から、5・6年のコミュニケーションの基礎を身に付けられる指導への「滑らかな接続」の意。

これらの解釈を踏まえて研究主題を書き下すと、

**「聞いたり話したりする活動を積み重ねることにより、英語を使ったコミュニケーションを身近なものとして感じさせる指導を通して、友達や教師の英語を注意深く聞いたり、英語を使って自ら進んで話しかけたりする態度を身に付けた児童を育てることを目指す。」**

となる。

次の段階では、個人的な発達の段階において無意識的に児童が使えるようになれば理想である。そのためには、**今の段階では授業で行う活動が、普段の活動として児童に根付かなければならない。その意味から、活動の内容に関する研究を深める必要がある。どのような活動が児童のコミュニケーションへの意欲をかきたてるのか研究するとともに、それらの活動が、児童をどのように変容させたかを常に見ておく必要がある。**

## 2 研究主題設定の趣旨

教育のグローバル化に直面し、初等中等義務教育学校でもカリキュラムの再編がなされてきた。特に、諸外国の人々と対面したとき、臆することなくコミュニケーションを図ろうとする意志と技能を持たせることは喫緊の課題である。これまで小学校においては、5・6年の児童に対して、年間35時間

の外国語活動の時間を設定し、コミュニケーション能力の素地を育成してきた。

このような外国語活動について文部科学省の調査では、小学生の7割が「外国語活動が好き」、中学生の8割が「小学校の外国語活動(簡単な英会話)が役に立った」と回答している。また、中学校教員は「外国語活動導入前に比べて、生徒による英語の聞く力・話す力が向上した」と肯定的に評価している。さらに、文部科学省の調査では、小学校高学年の児童が、簡単な単語においてさえ、書く指導がなされなかったことに物足りなさを感じていることとともに、中学1年生の8割以上が、小学校の外国語活動において、単語や簡単な文を書く活動をしておきたかったと回答している。このことと関連して中学校英語の授業において、音声から文字へのスムーズな移行がなされていない場合が散見されることも報告されている。また、低学年から外国語活動に取り組む約3000校(15%)では、高学年になるにつれて学習意欲が低下する傾向が見られる例も報告され、「話す・聞く」中心の活動に手詰まり感が読み取れる。

このようなことから次期学習指導要領では、児童の発達段階を考慮して、高学年で「聞く・話す」活動に加え、「読む・書く」活動を位置づけた教科としての外国語の授業が、中学年では「聞く・話す」活動を設けコミュニケーション能力の素地を養うことを目標とした外国語活動の授業が導入されることとなった。具体的には、中学年の活動領域として「聞くこと」、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」の3領域、また高学年では、それらに加え「読むこと」、「書くこと」の5領域としている。本来ならば文部科学省のこれらの方針を踏まえ、それぞれに研究主題を設定すべきところであるが、本年度は特に中学年の英語活動の円滑な実施を目指し、標記のように統一した主題を設定することにした。そこで本研究では、新たな活動内容として英語を使わなければならないような活動とそれに伴う教材を製作することで、簡単な表現が自然に身に付くようにすることや、ALT等が話す内容の文脈を推測する活動を考案することなどを通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲と態度を身に付けた児童を育成したい。

### 3 研究組織

研究組織として次の3つを構成する。

- ① 授業研究部…授業の構成を考え、指導案を中心とした研究を主に行う。
- ② 環境・教材整備部…授業を支える教室・校内環境整備と教材開発を中心とした研究を行う。
- ③ 統計処理部…定期的に行うアンケートの内容を研究し、実施後には統計処理を行う。授業評価について、評価の方法を研究する。

